



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041 横浜市磯子区栗木 1-22-3 / TEL 045-774-9861
洋光台キリスト教会内(蛭川明男牧師) / 世話人会代表 加藤 誠
事務局長 播磨 聡(広島キリスト教会 TEL 082-293-8683)

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

第二回 ルワンダ和解の現場・訪問ツアー

2016年9月5日～14日(現地6日～13日)、「佐々木さんを支援する会」主催第二回ルワンダ和解の現場訪問ツアーがおこなわれました(第一回は2013年)。全国からの参加者10名と共に、虐殺現場を訪ね、その悲劇を心に刻み、プロジェクト現場を見学しました。



参加者：安室有子さん、上瀧敦子さん、鈴木いのりさん、浜井憲二さん、瀧田めぐみさん、平野健治さん、広木愛さん、丸山大二郎さん、渡邊さゆりさん、播磨聡さん。

<旅の日程>

- 一日目：REACHの活動を学ぶ
- 二日目：キガリ虐殺記念資料館。ニヤマタ虐殺記念施設。石鹸プロジェクト。償いの家プロジェクト。
- 三日目：フィエに移動、PIASS教職員、学生との交流。
- 四日目：ニヤンザへ移動、お花畑プロジェクト参加者と交流。ニヤンザ・ピースアカデミー小学生と交流。
- 五日目：キレへへ移動、償いの家訪問、養豚共同組合訪問。参加者と交流。
- 六日目：キレへのバプテスト教会礼拝出席。
- 七日目：アカゲラ国立公園ドライブ。 八日目：ツアーの感想分かち合い。

皆さまのお祈りを感謝しつつ、佐々木さんの言葉と三人の参加者の感想をご紹介します。

「 紡がれ受け継がれた希望 」

佐々木 和之
さ さ き か ず ゆ き

■「和解の現場」訪問ツアー

9月6日からの8日間、日本から10名の参加者をお迎えして「和解の現場」訪問ツアーが実施されました。このツアーには、プロテスタント人文・社会科学大学(Protestant Institute of Arts and Social Sciences、略称 PIASS)で平和構築学を専攻する学生たちが立ち上げたピースクラブのメンバー8名(ルワンダ人3名、ブルンジ人3名、日本人2名)も同行しました。日本からの参加者、PIASSの学生たち、そして、私たちが支援してきた「和解と共生」の活動に取り組む村人たちが出会い、励まし合い、共に食事し、踊り、祈るという、深く心に残る交流が持たれたことに感謝しています。数多くの豊かな出会いがありましたが、そのいくつかをご紹介します。



(写真：移動中の車内のようす)

ツアーの5日目、首都キガリからマイクロバスに乗り、約3時間かけてルワンダ南東部のキレヘ郡を訪ねました。このキレヘ郡のカヴゾ村とルガンド村は、私がこれまで10年間に渡り、現地NGOのREACHと協力し、刑務所から出所し

てきた虐殺加害者を対象とした学習会、加害者が被害者家族のために取り組む「償いの家造り」、そして、それにより関係修復へと大きな一歩を踏み出した加害者と被害者による2つの養豚協同組合の創設支援に関わってきたところです。

私たちはまず、「償いの家」をいくつか見学した後、カヴゾ村の養豚協同組合を訪問し、生まれて間もない可愛い子豚たち、そして、笑顔いっぱいの組合員の皆さんに出会いました。前回4月に私が訪問した時と比べ、豚舎が増築されて2倍以上の規模になり、飼育する豚の数が倍増していたことに驚き、嬉しくなりました。この養豚組合には、約2年間、飼料代や医薬品代を支援しましたが、今年からは完全に自立経営を実現しています。前回は、支援なしで組合が立ち行くのか、少し不安気に話されていたリーダーのセルディヨさんが、今回は、「頑張っているよ」と、組合の成長を誇らしげに語ってくださいました。



(写真：養豚プロジェクトにて)

■アニエスさんの赦しの宣言

豚舎の訪問後、「償いの家」の前に設置された特設テントを会場に、2つ養豚組合の組合員を含む REACH の関係者との交流会が持たれました。ジェノサイドを生き残った被害者の方々、そして、隣人たちを集団で襲撃し殺害した加害者の方々が、代わる代わる立ち上がり、これまでの歩みについて語られました。

そこで語って下さったお一人、アニエス（アグネス）さんは、ジェノサイドで夫と子どもたちを殺されたばかりか、ご自身もレイプされるという壮絶な経験をされた女性です。彼女は、そこに集っていた 70 名ほどの人々を前に、ご自分が HIV に感染し、治療を受けておられることを告白され、同じ様な境遇にある女性たちの精神的な支えになれるように働いていきたい、そのために REACH に支援をお願いしたい、と訴えられました。そして、ツアー参加者の方をじっと見据え、真剣な表情でこのように語りかけられました。「私は自分にあのようなひどいことをした人たちのことを、謝罪した人も、謝罪していない人も、赦しました。うわべだけでなく、心の底から赦したのです」。

実は、アニエスさんは、キレヘ郡での和解と共生の取り組みが始まるきっかけを作ってくださった女性です。今から 10 年ほど前、仮釈放処分を受け、間もなく裁判を受けようとしている加害者たちを対象にした学習会に彼女をお招きし、50 名ほどの加害者たちを前に語りかけていただきました。彼女はまず、夫が民兵たちによって殺害されたこと、その後、彼女も首に縄を結びつけられて村役場前の広場まで引っ張っていかれ、夫を殺した男たちにレイプされたこと、そして、ジェノサイドが終わった後も、不眠症、悪夢、男性恐怖症等に苦しみ続けたことを、時に苦痛に顔を歪めながら語られたのでした。



(写真：赦しを語るアニエスさん)

その後アニエスさんは、どのように加害者に対する憎しみや恐怖心を乗り越えたのかについて語られました。ジェノサイドを生き残った女性たちと加害者を家族に持つ女性たちの癒しと和解セミナーに参加し、最初は相手側の顔を見るのも苦痛だったが、お互いの経験や思いを語り、聴き合う中で、女性として負わされている共通の苦しみや課題があることに気付いたこと、そして、協働グループを結成し、籠づくり等の活動に取り組むうちに仲間意識が育まれたことについて話されました。さらには、ある集会で彼女の親族の襲撃に参加した加害者から涙ながらの謝罪を受け、多くの加害者も虐殺への参加を強いられた被害者なのだと思うようになった、と語られたのでした。

彼女はその後、会場にいた進行役の牧師に、聖書の一節を読んで欲しいと言われました。そして、以下の聖句が読み上げられたのでした。

だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自身と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました（新約聖書 コリントの信徒への手紙二 5章 17・18節）。

その後すぐ、彼女は、「今は誰も憎んでいません。誰も怖くはありません。それは、私は新しく創造された者になったからです」と言われました。そして、参加者たちにこう語りかけたのです。「被害者の家族に直接謝罪していないのなら、どうぞ彼らを訪ねてください。自分の罪を認め、真実を語り、赦しを受けるために一歩踏み出してください。そうしたら皆さんは赦してもらえるでしょう。私は既に謝罪のために訪ねてきた七人の加害者を赦しました」。

このアニエスさんの語りかけに心を揺さぶられた加害者たちの中から、罪の告白と謝罪が生まれたのでした。その後、「加害者としての自分たちの責任は何か」を話し合う時間を持ち、「被害者を訪ねて謝罪する」、「裁判で真実を話す」、「自分たちが破壊した家を、被害者のために再建する」、といったことが話し合われたのでした。憎しみを乗り越え、加害者の赦しに向けて歩みだした被害者と彼らは出会い、励ましを受ける中で、刑罰として仕方なく家造りをするのではなく、心からの償いとして取り組む決意を固めたのでした。

あの時のアニエスさんの語りかけがなければ、キレへの村々で今見られるような和解と共生の取組みは有りえませんでした。そして今回、10年の歳月を経て、あらためて彼女は、「心の底から赦した」と宣言されたのでした。実は、彼女は最近、腰の痛みがひどいことを医師に訴えたところ、卵巣に癌ができていると診断を受けたばかりです。ですからそれは、彼女が痛みを抱えながら絞り出したとも言える、信仰者としての自らの実存をかけた宣言なのでした。大虐殺後の和解と共生の歩みは、アニエスさんのように、「赦されざる者を赦し」、和解の福音に生きようとする人々によって支えられているのです。

どうか、アニエスさんの今後の治療がうまくいき、彼女が癒されるようにお祈りください。

■受け継がれた希望

カヴン村での交流会の後、私たちはルガンド村に出かけました。もう一つの養豚協同組合の豚舎を見学した後、私たちが訪ねたのは、5m x 4mあるかないかの小さな家でした。その土壁の簡素な家で私たちを笑顔で出迎えてくれたのは、オスカルさんとクローディンさんという若いカップルでした。オスカルさんは、ジェノサイドで両親を殺されて孤児となりましたが、叔母にあたる虐殺生存被害者のサベリアナさんに育てられた青年です。クローディンさんは、サベリアナさんの襲撃に加わった虐殺加害者であるタデヨさんの姪（弟の娘）にあたる女性です。二人はまだ正式に結婚式をあげていませんが、昨年从这个家で暮らしはじめ、今1才になるムキザちゃんと親子3人で暮らしています。サベリアナさんとタデヨさんの和解のストーリーについては、『ウブムエ』18号をお読みください。



(写真中央、オスカルさんとクローディン夫妻)

その家の居間に迎え入れていただいてからしばらくすると、サベリアナさんが入ってこられました。「この二人が結婚したいと言った時、どのように思われたんですか」と私が尋ねると、彼女は、オスカーさんに思いを告げられた時、正直戸惑いながらも、「私は自分にあれだけひど

いことをした人たちを赦したんだから、何で彼らの結婚を許さないなどということが出来るだろうかと思って承諾しました」と、笑顔を交えながら話してくださいました。私が彼女と出会ってから7年以上になりますが、そう語る彼女はそれまでで一番嬉しそうでした。自分の敵であった人々と家族関係を結んでいくことには、私たちの想像を超える葛藤があったことでしょう。しかし、和解の道を歩み出していたサベリアナさんにとって、それを拒否するということは、自分の全てを否定するに等しいことだったのかもしれない。

サベリアナさんとタデヨさんの和解の歩みを若い二人が受け継ぎ、ムキザちゃん（「救い主」の意）という命が生み出されました。「見よ、新しいことを私は行う。今や、それは芽生えている」（旧約聖書 イザヤ書 43 章 19 節）。この奇跡とも言える和解の出来事、神の恵みの業に立ち合わせていただいたことに感謝します。しかし、それは同時に、癒しと和解のセミナー→女性協働グループの活動→償いの家造り→養豚共同組合と、キレヘ郡で REACH の活動に参加されてきた人々が、15年以上の歳月をかけて紡ぎだしてきた希望の結実でもあるのです。



(写真：ピースクラブのメンバーと)

■希望を受け取った学生たち

その日の夕食後、ツアー参加者と学生たちが

キレヘを訪ねて感じたことを分かち合いました。学生たちは、その日に見聞きしたことがどれだけ衝撃的であったかを口ぐちに語りました。ルワンダ人学生のロバートさんは、今回キレヘの人たちと出会うまで、「和解している」という人たちは、政府からのプレッシャーのために、本心からではなく、「和解しているふり」をしているだけだと思っていたとのことでした。しかし、今回、「自分は間違っていた。今日僕は、和解が可能だということを学んだ」と語りました。今も政府による市民弾圧が続くブルンジからの留学生のフロレヘンさんは、「ブルンジでは、加害者が真実を語り、被害者が赦すといったことは全く考えられない状況です。でも、ルワンダで起きていることが、やがて私の国でも実現する日が来てほしいと心から願います。私はそのために働いていきたい」との決意を述べました。

私はこれまで3年に渡り、平和構築を学ぶ学生たちを草の根の和解の現場に連れていくとともに、和解の歩み続ける人々を大学にお招きして、学生たちに直接語りかけていただくという試みを続けてきました。それは、ルワンダ、そしてアフリカ大湖地域にとっての本物の希望が、首都キガリをはじめとする都市部のきらびやかな発展などにはではなく、敵であった者を再び隣人として受け入れ、赦し、共に生きていこうと闘っている、名もなき人々の日々の営みの中にあることを確信しているからです。今回のツアーを通し、学生たちがその本物の希望を受け取ってくれたことを嬉しく思います。

2週間後に始まる「和解の理論と実践」という集中講義には、キレヘから少なくとも2名の方々をお招きしてお話をうかがうことにしています。前述のキレヘでの交流会では、生存被害者のジャンさんが、「詳しいことは、大学に行ってもっと話してあげるから、待ってなさい」と、誇らしげに、顔を輝かせながら学生たちに語り

かけておられました。ジャンさんをはじめ、和解と共生の歩みを続ける村の人々も、彼らの言葉に心を揺さぶられ、「和解は可能なのだ」と語る学生たちの中に、確かな希望を見ておられるのです。

(写真左から、ブルンジ留学生フロレヘンさん、サベリアナさん、センター主事セルジさん)



赦し、個別の言葉として

世話人 播磨 聡

今回、同盟、沖縄、連盟の三バプテストの教会から参加者が与えられました。また、PIASSの学生（ルワンダ、ブルンジ、コンゴの学生たち。また日本からの留学生である北村美月さん、向地由さん）とも一緒に現場を訪問できたことは、それぞれの背景や思い、課題を分かち合い、和解の現場で起こっている出来事を深く理解するためにも貴重な時となりました。

特に、現在も政情不安により暴力が実際に起こっているコンゴ、ブルンジからの留学生たちにとって、癒しと和解のプログラムを受けて謝罪する加害者と、赦しの言葉を語る生存被害者の存在、また両者による共同プロジェクトは、驚きであり、衝撃のようでした。私も、その告白の場面に、直接立ち会わせていただき、その語感や表情をとおして言い表せぬ思いまで伝わってくるように感じ、頭で理解していた思いが打ち砕かれていきました。ここに希望がある。この場面を彼ら留学生と共に、私もしっかりと心に刻みたいと思う瞬間でした。

その中で学んだことは、「赦し」を決意した人々の中には、いくつもの層があり、決定的な赦しの決断をしたと語る生存被害者と、継続的に赦しを決意しつづけると語る方がおられました。赦しの

意思是、個別の出来事であり、ステレオタイプに理解してはいけないものようです。それゆえに、一人一人の傷に寄り添う中でないと、その本質を理解し得ないものであることを教えられました。



(写真：ニヤンザ・ピースアカデミー)

また、ルワンダには多くの子どもたちが育っています。これからジェノサイドを経験していない次の世代の若者たちが増えていくことでしょう。彼らが非暴力、草の根における平和構築への意思を形成できる取り組みが必要だと感じました。さらに、和解の取り組みにおいて、被害者による赦しの決断のインパクトの大きさによってかすんで

しまいがちな、加害者がなぜ加害者となっていたのかという過程の分析にも関心を抱きました。涙を流しながら罪の告白と赦しを求める加害者の言葉は、きっと真実なものでしょう。だからこそ加害者となっていた原因、再びそうならないためにも、そうなってしまった個人レベルにおける心理過程を学びたいと思いました。そこには、私たちが抱える、中国、韓国、北朝鮮、アジア諸国、そして沖縄、広島、長崎、福島の課題、そして日常的な対立や犠牲を生み出し続ける社会の在り方を考えるヒントがあるように思いました。

現場で出会う子どもたちの素朴な笑顔、そして、終盤に訪れた自然公園の気品をもった動物たちの姿にも「ルワンダ」を感じる旅となりました。



(写真：参加者とルワンダの子どもたち)

ルワンダの地に立って

西南学院大学大学院神学研究科

広木 愛



(写真：償いの家、養豚プロジェクトの方々
の前で証をする広木愛さん)

ルワンダからもうすぐ1週間が経とうとしています。ウブムエの原稿を書こうと色々読み返してありましたら、ウブムエのバックナンバーにフロレヘンさんとセルジさんの記事を見つけました。これまで何気なく読み流していた記事が、目にとまりました。

セルジさんとは、前回福岡で顔は合わせましたが、名前を知っている程度でした。でも、今回ルワンダに伺って、佐々木さんの報告に出て

くる人たちに直接出会い、ウブムエに書かれている一文字一文字が、わたしに向かって踊り出てきました。原稿を読みながら涙がとまりません。人と出会うことは、こんなにも見える景色が変わることなんだと感じます。

ルワンダでは、素晴らしい出会いが与えられました。

■ジェノサイド経験者の方々との出会い■

深い傷を負いながら、語って下さる方々の言葉に多くの気づきをいただきました。生存被害者の女性が「赦すことは、自分の中で、ゆるすことが分かると、人を赦すことができる。赦すことは、赦すということが続けることなのです」と語っておられました。赦すという行為は、葛藤しながら赦し続けるという思いを持つことで、そこから和解へと繋がるのだと教わりました。そして、ジェノサイド生存被害者と加害者の家族と一緒に花を育てているお花畑プロジェクト

の女性たちから、もっと明確な言葉が与えられたと思います。彼女たちは、「お互いが持っている苦しみを理解しながら、一緒に、笑いながら、冗談を言いながら活動していくことから一致が生まれる」と語っておられました。笑顔は和解の一步なのだと感じました。



(写真：お花畑プロジェクトの方々と)

■PIASSの学生たちと

現地の子どもたちとの出会い■

私たちと一緒に、数日プログラムに参加した学生は、ルワンダ人の学生だけでなく、ブルンジ、コンゴ、日本と一人一人が異なったバックグラウンドで、痛みを持ちながら平和について考えることで、平和への考え方の広がりを感じました。子どもたちの目はみんな輝いてました。子どもたちは、挨拶してくれたり、積極的に話しかけてくれます。22年前、彼らくらいの子どもたちも無惨に命を奪われたという現実に、心を痛めながらも、彼らの表情や目の輝きに、将来の希望を見ることができました。

■参加者との出会い■

今回のツアーは、日本バプテスト同盟、沖縄バプテスト連盟、そして日本バプテスト連盟からの参加者が集まりました。一人の参加者が償いの家を訪問したときの証しで、「ルワンダに来る前は、被害者が加害者を本当に赦せるのかと思っていた。71年前の戦争で祖父を亡くした。今でも、本土の人に怒りを覚えることがある。けれども、実際ルワンダで被害者の方の証を聞

いて、本当に赦しており、今も赦し続けているのだと実感した。だから私も赦そうと思ったし、赦せると思った。」とおっしゃられました。今回のツアーの豊かな出会いがここにも備えられていました。

■ルワンダでの出会いを通して■

ルワンダを訪れたかった私の目的は、『和解』と『ゆるし』がどのように作られていくのかを、自分の耳で、目で、肌で、足で、手で、感じたかったからです。けれども、このルワンダでの出会いを通して分かったことは、相手を理解するという事は、難しいということです。今回、私はたくさんの事を見て、たくさんの人と出会いました。けれども、わたしが本当に理解したことは、体験した中のほんの少しだけだとわかりました。それでも、ほんの少しでも、感じられたことはとてもうれしいです。だから、もっともっと知りたいという思いが与えられています。人と出会うということは、そこにある多くの悲しみ、苦しみ、そして和解から生まれる未来への希望がリアリティをもって体験することで、和解の出来事は、お互いが相手の痛みを理解し、その痛みを共感し、分かち合いながら生きるということなのだろうと思いました。

これからも、ルワンダのことを覚え、祈り続けていきます。

MURAKOZE CYANE. (ありがとうございます)



(写真：お花畑プロジェクトの女性たち)

先行する赦し

日本バプテスト神学校 (日本バプテスト同盟)

丸山 大二郎

ルワンダの街は、ここで大虐殺が起きたことを忘れてしまうほど活気に満ち溢れ、賑わっていました。しかしツアーで訪れた先々でのジェノサイドの被害者と加害者の方たちの証言、虐殺が行われた現場を訪問する中で、そうではないと我に返ります。

二日目に訪れたニヤマタ虐殺記念施設は当時のカトリック教会跡地で、大勢の人がその教会に逃げ込み、教会が大量虐殺の現場となりました。その際のやりゅう弾による爆発の跡、虐殺によって殺された人たちの衣服や血のシミも今もなお、生々しく残されていました。また外には遺骨を保管してある地下室があり、そこを見学させていただきました。異様な雰囲気包まれていて、置いてある遺骨が何か語りかけてくるようでした。その後、サバイバーの女性フィロメンさんの証言を聞きました。彼女は、この教会に逃げ込んだ人で生き残った7人のうちの1人でした。彼女が語る言葉一つ一つに重みがあり、当時の悲惨な状況を物語っていました。特に彼女の「赦しは憎しみからの解放に始まり、それが出来ないと他者を赦すことはできない」という言葉が非常に印象に残っています。わたしは、彼女が苦しい過去を背負いながらも堂々と話している姿に強さを感じました。大抵の人は自身の痛みや辛さを堂々と話すことは躊躇すると思います。また「赦しはそこで完結するのではなく、プロセスとしてこれからも赦し続ける」と伺いました。ジェノサイドが再び起きないように、また加害者を赦している和解の思いが表れていました。主イエスが教えてくださった、「先行する赦し」を彼女から学びました。

そして、その施設のすぐ隣には学校があり、多くの子どもたちが遊んでいました。すぐ隣に位置している

のに、全く違う空間にいたようでした。この子どもたちはジェノサイドについて学ぶ機会があるのだろうか、子どもたちが彼女の話の聞いたなら何を感じるだろうか、わたしの中で多くの問いが出ました。また「償いの家造り」参加予定者を訪問した際も多くの子どもたちが集まってきました。おそらく興味本位で集まってきたのでしょうか。その子どもたちの興味がこの場所で行われたことの意味をわかる日がいつの日か来ると希望を抱いています。



(写真左端：証言をしてくださったフィロメンさん)

三日目は、PIASSの学生たちとの交流の時間がありました。ルワンダ出身の学生だけでなく、ブルンジ、コンゴから来ている学生もおり、自国の現状や課題などの意見を聞くことが出来ました。政治的な争いが起きている、多くの人が困難な状況にある、メディアが閉鎖され何を信じていいのかわからない等、細かく話してもらい、学生たちの自国の状況の認識や平和に対する意識の高さを感じられました。そして、平和を造り出す文化を遊びやワークショップを通じて次世代につなげたいとも述べていました。主体性を持って、平和を実現するために取り組むPIASSの学生の姿をわたしが見習わなければいけないと思いました。そして平和は、一人ではなく、多くの人と造り上げていくの

だと改めて実感しました。次世代を担う人達がジェノサイドの被害者や加害者、REACHの方たちと出会い、関係を築くことで平和への意識が積み上げられてほしいと期待をします。

ルワンダに旅立つ前にジェノサイドのことを予習しましたが、本からでは伝わらない痛みや経験を被害者の方々の生の証言から聞くことが出来、REACHのプロジェクトやPIASSの学生との取り組みはわたしにとって非常に貴重な経験になりました。このツアーで多くの人と出会い、交わる機会がありました。それは佐々木さんの今までの関係によって積み上げられてきたことを目の当たりにしました。その素晴らしい関係の輪の中に身を置き、学べたことを本当に感謝します。神様によって佐々木さんやプロジェクトに携わる人達

の働きが支えられ、ルワンダを担う子どもたちに平和への希望が継承されるよう、そしてルワンダの地に一日も早く平和が訪れるようにと祈っています。



(写真：PIASSの学生と握手する丸山大二郎さん)

ツアーでの出会い



(写真：ピースアカデミーの子どもたちとソーラン節)



(写真：朝食はテラスで)



(写真：キレへのバプテスト教会での礼拝)



(写真：お食事はおいしくいただきました)



(写真：継続している償いの家づくり。REACH のカリサさん (左) と抱き合う男性。彼は、生存被害者で、虐殺後孤児として育ってきた。次の償いの家は、彼のための家づくりとなることが発表された瞬間。)



(写真：ブルンジからの留学生と)



(写真：償いの家の前でダンスを共に)



(写真：上写真の場面を見守る子どもたち)



(写真：石鹸プロジェクトの女性たち)



(写真：お花畑プロジェクトの方々と)



(写真：凜とした気品を感じる草原のキリン)

事務局からのお知らせ

- 佐々木和之さんの今年二度目の帰国は、10月18日～11月7日です。各地でおこなわれる報告集会へ、ぜひ、ご参加ください。入場無料。
- 今回は、支援会主催でおこなわれた「ルワンダ・和解と現場訪問ツアー」の様子をご紹介します。全国各地から、また、様々な団体・教会から、参加者を送り出してくださり、ありがとうございました。ルワンダの空気、また、参加者や現地の方々の息遣いを感じていただければ幸いです。
- 佐々木和之さんは、来年も6月と11月に帰国し、報告集会をおこなう予定です。報告会等を希望される教会、地方連合、学校関係の方は、「支援会」事務局長の播磨（携帯090-6150-0268）までご相談ください。
- 年間4回、季刊発行の「ウブムエ」ですが、今回、事務局長の都合で夏号を発行できませんでした。佐々木さんの活動が誠実に進められている様子をお伝えできず、申し訳ありませんでした。お詫び申し上げます。
- 支援会開始時より、世話人になっていただきました村上千代さんは、7月をもって世話人を退かれました。これからも様々な場面でご協力をいただく予定ですが、これまでの働きを心より感謝申し上げます。

帰国報告集会 2016 のご案内

報告集会 in 福岡

2016年10月29日(土) 10:00-12:00 会場：長住バプテスト教会
福岡市南区長住1-8-20 電話 092-511-5967 牧師 中條譲治、中條智子

報告集会 in 佐世保

2016年10月30日(日) 15:00-17:00 会場：相浦光キリスト教会
佐世保市新田町276-2 電話 0956-48-5077 牧師 武林真智子

報告集会 in 東京

2016年11月5日(土) 15:00-17:00 会場：大井バプテスト教会
東京都品川区大井5-10-12 電話 03-3771-6849 牧師 加藤 誠

- 事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求ではありませんのでご了承ください。必要な方はご利用ください。

郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会

佐々木さんを支援する会HP (ホームページ)

<http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。HPから入会手続きも可能です。佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

世話人会 加藤 誠 (大井教会牧師)、中條智子 (長住教会牧師)、蛭川明男 (洋光台教会牧師)、
播磨 聡 (広島教会牧師)